

聖書：ルカ 23：26～31

説教題：誰のために泣くか

日時：2013年2月17日

イエス様はローマ総督ピラトのもとでの裁判を経て、ついに十字架への道を歩き始められます。十字架刑に付けられる人は、処刑場まで十字架を担いで、町中を練り歩かなければなりません。しかし26節に、「彼らは、イエスを引いて行く途中、いなかから出て来たシモンというクレネ人をつかまえ、この人に十字架を負わせてイエスのうしろから運ばせた。」とあります。おそらくイエス様の体力はすでに限界に達していて、これではとても処刑場までたどり着けないと判断されたのでしょう。夜中じゅう何度も裁判のために引き回されて一睡も許されなかったイエス様、またピラトの前ではむちで打たれ、役人や兵士たちからさんざんの扱いを受けられたイエス様は、この時には十字架を背負って歩くだけの力は残っていなかったのでしょう。

その結果、クレネ人シモンが突然、十字架を負わされる羽目になります。彼はこの過越の祭りのためにやって来て敬虔な思いで参加しようとしていたところを、いきなり捕まえられてしまいます。他の福音書には「無理やり背負わせた」と書かれています。彼としてはこんなものを背負って歩くことなど、絶対にしたくなかった。これは死ぬより他に何も残されていない最低の人間が負うべき卑しむべき刑罰です。誰がそんなものを、犯罪人の後について、背負って歩きたいでしょうか。

このシモンについて、聖書の他の箇所から分かることがあります。一つはマルコの福音書15章21節に「アレキサンデルとルポスの父」と注釈されていることです。マルコの福音書はペテロの書記であったマルコがローマの教会のために書いた福音書ですが、そこにわざわざシモンの二人の息子の名前が記されたのは、ローマの教会にその二人が良く知られた人たちだったからに他なりません。そしてパウロがローマの教会に書き送ったローマ人への手紙16章13節に、「主にあって選ばれた人ルポスによろしく。」と出てきます。おそらくシモンは、十字架を背負ってイエス様の後ろからついて行く経験を通して主を信じる者となり、その信仰が家族に伝えられ、その息子たちがローマ教会の重要な働き手になっていたということでしょう。

この十字架を負うシモンの姿は、イエス様の弟子としての歩みを象徴していると言われます。イエス様は「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」と言われました。しかしもう一つの見方もあります。それはこの十字架は本来、私たち一人一人が背負って、そのまま死刑にされなければならなかったところの自分の十字架という見方です。私たちはイエス様に従うことによって、そうであれば担わなくて良い十字架を背負わされるのではなく、これは私たちが自分の罪ゆえに背負い、最後にそのまま張り付けにされなければならなかったところの十字架ということ。シモンはその自分の十字架を担った。しかし最後に、その呪いの木についてくださったのはイエ

ス様であった。自分が付けられるべき十字架に、イエス様が身代わりに付いてくださった。そのようなものと見ることができますし、シモンはそのようにこの出来事をとらえて、後に信仰に入ったのではなかったでしょうか。

さて、十字架へと向かうイエス様の後に、大ぜいの民衆やイエスのことを嘆き悲しむ女たちの群れがついて行った、と27節にあります。しかしイエス様は女たちに言われました。28節：「しかしイエスは、女たちのほうに向いて、こう言われた。『エルサレムの娘たち。わたしのことで泣いてはいけません。むしろ自分自身と、自分の子どもたちのことのために泣きなさい。』」これはどういうことでしょうか。それは一言で言えば、このエルサレムの町に間もなく神の厳しい御怒りが臨もうとしているからです。29節：「なぜなら人々が、『不妊の女、子を産んだことのない胎、飲ませたことのない乳房は、幸いだ』という日が来るのですから。」イエス様はこれまでもエルサレムに下るさばきについて、繰り返し語って来られました。13章34～35節：「ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打つ者・見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。」19章43～44節：「やがておまえの敵が、おまえに対して壘を築き、回りを取り巻き、四方から攻め寄せ、そしておまえとその中の子どもたちを地にたたきつけ、おまえの中で、一つの石もほかの石の上に積まれたままでは残されない日がやって来る。」21章23節：「その日、哀れなのは身重の女と乳飲み子を持つ女です。この地に大きな苦難が臨み、この民に御怒りが臨むからです。」これはエルサレムが神を退け、神が遣わした預言者たちを退け、ついに神が遣わした最後の預言者、神の御子さえも退けたからです。本来、子どもを産み育てることは神の祝福なのに、かえってその日にはそれが災いに転じてしまう。

30節には「そのとき、人々は山に向かって、『われわれの上に倒れかかってくれ』と言い、丘に向かって、『われわれをおおってくれ』と言い始めます。」とあります。山が倒れかかったら、どうなるでしょうか。死んでしまいます。丘がおおったらどうなるでしょうか。下敷きになってつぶされてしまいます。しかしその方がまだまし、と思われるほどの苦難が臨むのです。生きてることが地獄以外の何ものでもない日が来るのです。

そして31節：「彼らが生木にこのようなことをするのなら、枯れ木には、いったい、何が起こるでしょう。」細かい点に入ると解釈は様々に分かれていますが、この言葉の基本的な意味はすぐに分かるでしょう。それは「生木」とはイエス様を指し、「枯れ木」とはエルサレムの人々、引いては私たちすべての罪人を指すということです。また「生木にこのようなことをする」という部分は、イエス様の十字架の死に至るまでの苦しみを指し、「枯れ木には、いったい、何が起こるでしょう。」という部分は、特にこれからエルサレムに臨む神の裁きを指すということです。つまりこのメッセージはこういうことになります。「もし、罪のないイエス様が、罪人の身代わりをするために、このように神のさばきに服し、苦しみを受けるなら、枯れ木である罪人が、神の救いを手にせず、その御怒りの御手に陥る時、どんなに恐ろしいさばきと苦しみが臨むことになるだろうか。」

これは第一義的にはエルサレムの娘たちに向かって語られた言葉ですが、それは言うまでもなく今日の私たちにも当てはまる言葉です。イエス様がここで直接的に差しておられたエルサレムの滅亡は紀元 70 年に生じました。しかしエルサレムの滅亡は、21 章で見ましたように、やがての最後のさばきの前触れとしての意味を持つものです。来たるべき最後の審判の前兆なのです。従って本格的なさばきはこれから来ます。ですからもし私たちが自分の罪を残した枯れ木のままなら、ここで言われていることが究極的な仕方で自分に臨むことになります。そしてその日に、その人はまさに 30 節のように言わなければならない。

参考にしたいのはヨハネの黙示録 6 章 15～17 節：「地上の王、高官、千人隊長、金持ち、勇者、あらゆる奴隷と自由人が、ほら穴と山の岩間に隠れ、山や岩に向かってこう言った。『私たちの上に倒れかかって、御座にある方の御顔と小羊の怒りとから、私たちをかくまってくれ。御怒りの大いなる日が来たのだ。だれがそれに耐えられよう。』」 まさにその日、罪の解決を持っていない者は、山や岩に向かって、自分の上に倒れかかってくれ！と願う。それほどに神のさばきは恐ろしい。死よりももっと恐ろしい。そしてここに「御座にある方の御顔と小羊の怒りとから」とあります。小羊は私たちにとって唯一の望みです。私たちの身代わりに血を流してくださったイエス・キリストのことです。しかしこの方を受け入れないなら、やがての日にはこの小羊も、神と共に怒り手に回る。そうしたらもう、どんな望みも私たちにはありません。そしてさらに注目すべきは、山や岩が自分たちの上に倒れかかってくれ！かくまってくれ！と人々は願いますが、それが聞かれるとは書かれていないことです。そのようにして神のさばきから逃れたいと必死に願うけれども、それは聞かれない。ではどうなるのか。9 章 6 節：「その期間には、人々は死を求めるが、どうしても見いだせず、死を願うが、死が彼らから逃げて行くのである。」 人々は早く死んで神のさばきから逃れたいと願いますが、何と死が逃れて行く。すなわち死ぬことができない。死にたくても死ねない。つまり永遠に苦しみ続ける。もし神にさばかれて私たちの存在が終りになるなら、「消滅」という形で終わるなら楽です。しかし聖書は、たとえこの世で一度死んでもすべての人は生き返らされて、神のさばきの前に立つと語っています。そしてそのさばきにおいて、さばかれる人は死にたくても死ねない。山よ、岩よ、自分の上に倒れかかってくれ！と叫んでも、そうならない。死はその人から逃げ去り、その人は永遠に昼も夜も苦しみ続ける。ウェストミンスター信仰告白第 33 章 2 節：「神を知らず、イエス・キリストの福音に服さない悪人は、永遠の苦悩に投げ込まれる」

私たちはこのイエス様の言葉に真に耳を傾ける者でしょうか。自分のために泣くとは、自分が神の御前にどんなに大変な罪を犯しているかを省みて、それを悟り、悲しむことです。そのままではどんなに厳しいさばきを刈り取らなければならないかを知って、わななくことです。そして神の前にへりくだり、あわれみを乞う。その時に私たちは分かります。そんな私のためにこそ、イエス様がこの時、このように十字架への道を歩いてくださっていたということ。私たちはそのことをただ信じ、感謝して、この神の救いの方法により頼めば良い。その時、イエス様の十字架は私の身代わりを果たしたものとカウントされるのです。そして私の罪は御前

に全く赦され、さばきの日にも私たちは恐れずに立つことができるのです。

しかしもし私たちが自分のために泣かないなら、どうなるでしょうか。それは自分の罪を残すことです。その人はかの日になって、山よ、岩よ、自分を覆ってくれ、いのちを取ってくれ、と叫ぶものの、決してかなえられない。死は逃げて行き、神と子羊の怒りに永遠に服さなければならぬ。もうどこにも逃げ場はないのです。

イエス様は十字架を担って歩けないほどの苦しみのただ中にありながら、エルサレムの娘たち、また私たちのことを心にかけてくださいました。そしてわたしのためにではなく、真に泣くべきことのためにあなたがたの涙を用いよ、と言われました。災いの日が来ない内に、今日という日の内に、と。その言葉に耳を傾けて、私たちは自分の罪を悲しみ、そんな私たちのためにこの十字架への道、ヴィア・ドロローサを歩いてくださったイエス様によりすがりたい。イエス様はこの悲しみの道においても、私たちを招いてくださいました。その主に信頼して、さばきの日にも確信と賛美を持って立つ者へ、そしてこの御子にあつて罪赦され、永遠の命へと入らせて頂く幸いな信仰者へ導かれたいと思います。